10 月 12 日 メッセージ

聖書：テサロニケの信徒への手紙二 3 ： 6 - 13

「たゆまず善いことをしなさい」

「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」(コヘレトの言葉 3:1)

この聖句を読むと 10 年前に天に召された山本厚子姉を思い出します。かにた婦人の村でご一緒したこと、バザーで楽しく奉仕くださったこと、わずか二日後に教会で倒れられたこと。友人の結婚式出席をキャンセルしようかと悩んでいた時、ご家族が背中を押してくださったこと。場所が離れていてもスマートフォンで全て連絡ができたこと。どのタイミング一つとっても、神が備えられた時があるのだと思い知らされました。

一方、「まだ時ではない」と知らされることも多いのも事実です。苦労して準備したものが無駄になることは日常茶飯事でしょう。高校受験、大学受験、司法試験……いずれも第一志望には断られました。望んだ結果は得られませんでした。

しかし、それら一つひとつは無駄ではありませんでした。そこで培われたものが「今」の私を形作っています。むしろ、それらがあったからこそ、今の自分は生きていると言えるでしょう。

その意味では、大変個人的なことではありますが、「選択的夫婦別姓」がまた遠のいたのは、やはり「まだ時ではない」ということなのでしょう。その時に備えてしっかり準備し続けなければならないということだということです。

また、(国会議員を相手にしたスピーチではありますが) 党の代表が「馬車馬のように働く」と発言したことは、「働かざる者食うべからず」「自己責任」という排除の論理を（再び）生み出しかねません。公的な支援を期待することが難しくなるかもしれません。ぶどう園で朝から働いた者たちが「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」(マタイによる福音書 20:12)と不平を漏らしたように、社会全体がギスギスするきっかけになりえます。せっかく「多様性」という言葉とその意味が世の中に浸透してきたこのタイミングにもかかわらず、「まだ時ではない」ということなのでしょうか。

「そのような者たちに、わたしたちは主イエス・キリストに結ばれた者として命じ、勧めます。自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい。」(テサロニケの信徒への手紙二 3:12)

パウロは「まだ時ではない」と不安を抱く私たちに落ち着くようにと勧めています。他者との比較ではなく、目の前にある自分の働きに没頭せよ。そうすることで、自分に注がれている神の恵みに気づくことができる、と。

人は手前勝手に分け隔てするけれど、神は決して分け隔てされることはありません。朝から働くことができる者にも、一時間しか働くことができない者にも、等しく恵みを注いでくださいます(「自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。」マタイによる福音書 20:14)。

だから、何事にも惑わされることなく、社会の情勢がどのようであったとしても、「あなたがたは、たゆまず善いことをしなさい。」(テサロニケの信徒への手紙二 3:13)と呼びかけるのです。

「善いこと」とはまず、神にとって「善いこと」に他なりません。神を見上げ、神に聞き、神に従う。いついかなる時も神と共に歩むことです。次いで、隣人にとって「善いこと」です。小さくされている人、弱りを覚えている人に寄り添うこと、祈りをもって支え合うことです。そしてもちろん、自分にとって「善いこと」も含まれます。必要以上に自分を卑下することなく、自分を愛すること。他者との比較ではなく、自分にできる精一杯をやり続けることです。

もしかすると今、世界は神の愛から離れて行こうとしているのかもしれません。その中にあって私たちは神から託された愛の業を果たしていきたいと願っています(「わたしたちの神、主の喜びが／わたしたちの上にありますように。わたしたちの手の働きを／わたしたちのために確かなものとし／わたしたちの手の働きを／どうか確かなものにしてください。」詩編 90:17)。そのために今日もたゆまず善いことを行い続けるのです。